

「神に造られた男と女」

1A 神への献身

1B 神による創造 創世記 2 章

2B キリストと教会の関係 エペソ 5 章

3B 頭 1コリント 11 章 3 節

2A 男らしさ「神の前に出られる男」詩篇 51 篇

1B 自分の責任 1-4

2B 透明性 5-9

3B 神の恵み 10-15

4B 砕かれた魂 16-19

3A 女らしさ「主を恐れる女」箴言 31 章 10 節以降

1B 夫の強い助け手 10-12

2B 進んで行なう勤勉さ 13-18

3B 先を見越した心遣い 19-25

4B 勝ち取られた栄誉 26-31

本文

今回のキャンプにおいて、私は、とても具体的になろうと思います。具体的というのは、ここに集まっている皆さんが、二十代であり、すでに成人であるということです。様々な年代の人々が教会の中で集まっている中では、配慮しなければいけないことがあります。場合によっては誤解を受けるかもしれません。けれども、はっきりと二十代の皆さんに対しては、「結婚」を前提としたお話しをしたいと思います。男と女のこと、夫婦のことについて話します。ですから、神から授かった性も含めてお話しします。このことをはっきり聖書から話すことによって、この世においていかに、自分たちが聖なる者、神の所有の民とされているのかを知っていきたいと思います。

結婚について、また男女の違いについての本は、キリスト教、一般書のどちらにも豊富に出版されています。キリスト教関連の書物については、実際の男女や夫婦の話が数多く出ていますが、残念ながら、聖書の人物からしっかりと男らしさと女らしさが語られているのは、私もじっくり見ている訳でないのだから分かりませんが、とても少ないと思います。どのように男女のコミュニケーションをすればよいのかとか、心理学的な男女の違いであるとか、そのような「どうすればよいのか」というハウツーのものが多くあります。しかし、私たちは信仰によって神に義と認められています。私たちが生きているのは、神を信じる信仰によってであります。信仰はハウツーでしょうか？違いますね、主との人格的な関係をいかにしっかりさせているか、そのことから他の全ての良き物が出ています。

1A 神への献身

ちなみに私は結婚してから、約23年経っています。結婚する前後は、いろいろな声を欲していました。結婚する前は、「性格の調和が必要だ」という意見を、あるキリスト教団体のスタッフから聞きました。私はこうした声を聞いたのは、大きな失敗でした。今の妻とは性格が大きく違うからです。お父さんとお母さんを見てください。性格は調和していますか？性格が調和している人などまずいないし、聖書には性格の調和について何ら書いていません。父と母を見れば、その根底には「互いに助け合うことを決めてしまっている。」というのが見えてくるでしょう。そこに全てを捧げるという愛があるでしょう。性格の調和など、後でちょっと考えればよいことです。

このように意外に、キリスト教の中でも世の価値観が入っています。それは、ちょうど本当に性生活が良くできるか、合っているかどうかわからないから、結婚前に試していこうと言っているのと同じ論法です。肉体についてそのようなことで推し量ってはいけなさと分かっているキリスト者でも、心理学的なことについては、聖書の価値観から離れてしまっていることがあります。

1B 神による創造 創世記2章

聖書は、神と自分との関係の延長線上に男女関係をおいています。それは、「献身」に基づく愛です。神にすべてを捧げて、この方に信頼し、拠り頼み、従い、仕えるように、自分自身をこの方に任せています。明け渡しています。神との関わりに対して、それを最優先事項にしています。そして、どんなことがあってもこの方を選び取ることを決めています。それは、神が自分を造られたから、ということ。また神が自分に対して愛しておられ、キリストにあって全てを捧げてくださっているからに他なりません。その延長に、男と女の間関係があります。

有名な聖句ですが、「創世 2:24 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」とあります。ここには、「男はその父母を離れ」と初めにあります。これは、男が男になる瞬間です。男が両親の保護から離れる時です。彼が両親を通して神に従っているところから、自分自身で神ご自身に従うようになることです。何かを決断する時は、自分以外には神ご自身しかおられないという状態です。真のリーダーシップを取る瞬間です。

ヨハネ第一の手紙で、霊的な成長にしたがって、使徒ヨハネが呼び名を変えているところがあります。「子どもたちよ。」と呼んで、それからあなたがたの罪が赦されたと言っています。キリスト者として生きるのに、初めに知る必要があることは自分の罪が赦されたことです。そして、「若い者たちよ。」と呼んでいます。それは「あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。」とあります。罪に対して打ち勝つことができるようになる、そうした霊的成長があります。そして、「父たちよ。」と呼んでいます。「あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。」と言っています。初めからおられる方、そう神ご自身です。この方を知ることとは、すべてのことにおいて神以外には、初めに行わなければいけない。つまり物事を初めに決断し、それによって人々を守り、養い、そして最後にも、その決断に従った結果に対して責任を負います。(1ヨハネ 2:12-14) 父母を離れるという

ことは、初めの方を知るという第一歩であり、キリストを直接の自分の頭としていくことです。

そして次に、「妻と結び合い」とあります。結ばれるのですから、神とキリスト以外の他の何物によっても、切り離されることはありません。これは優先順位を示しています。分かり易く言えば、妻が最高の親友になることです。他のいろいろな関係の中で、妻との関係を最優先します。妻と誰かがそりが合わないとか、意見が対立している時に、その仲裁に入ろうとしたら夫として失格です。妻との間に、例えば、自分の母親が入るかもしれない。けれども、それでも妻の側に自分が寄り添うことができるかどうかを試されます。そして、一体となります。これは男女の霊的な一体、精神的な一体、そして肉体的な一体です。それから、子どもが一体の結実と言ってもよいでしょう。

2B キリストと教会の関係 エペソ 5 章

そして夫と妻の関係において、もっと具体的に何をしなければいけないのか。エペソ書 5 章によれば、「妻は、夫に従う」であります。そして、夫は「自分の体のように妻を愛する」であります。5 章 22 節から 33 節までに書いてありますね。ここで大事なのは、夫婦の関係が、キリストと教会の関係を表しているということです。妻が夫に従うのは、教会が主に従うように従うからだ。夫が自分の体のように妻を愛するのは、キリストが教会のためにご自身を捧げられたからだ、ということです。とても単純な命令ですが、それぞれのその単純な命令を与えることによって神は夫婦を祝福されています。

ここに冊子の一部がありますが、「クリスチャンの家族関係」という本の日本語訳です。チャック・スミスが書きました。ここにエペソ 5 章を使った夫と妻との関係について述べてあるので、ぜひ読むのを勧めます。神が男を造られ、男から女を造られました。そのため、女の必要は「愛されている」という保障、安心が欲しいということでもあります。男の人は、なぜ自分に妻がついて来れないのか、といら立つことがあります。けれども、キリストに自分が従っていることを考えればよいでしょう。自分自身を全て捧げて、キリストに従うことは、あくまでもキリストが私を愛して、全てを捧げてくださったから、その愛があるから捧げることができます。その愛の保障なくして従いなさいとだけ言われたら、それは奴隷です。妻とて同じなのです。

そして男の必要は、「妻が自分のしていることに従っていてくれる、支えていてくれる」という安心感です。自分が取り組んでいることに対して、それに全面的に従っていている時に男は信じられないほどの力を発揮します。チャックが書いたこの本によると、初めて折り畳み式ベビーカーを発明した人の話が出ています。赤ん坊のいる夫婦でしたが、どこかに行く時に車に乳母車を上に縛りつけたそうです。もう車の中に入れることができなかつたためです。かなり不便ですね、それで彼はエンジニアだったので、奥さんは、「あなたはこの世で一番頭の良い人だから、車のトランクに入るよう、折りたたみ式のベビーカーを考えてみたらどう？」と言ったそうです。それが、彼が何日もかけて作った、折り畳み式のベビーカーだったそうです。彼は、自分が妻の望むような世界一頭の良い男でないことを知りつつ、いつもそうでありたいと願っていたそうです。

そして、このように自分が妻を支えているという自負があると、夫は自分のしていることが信じられないぐらいできるようになります。妻が男としての必要を満たしているからです。そして、その妻を夫は守り、養い、寄り添います。そして妻は愛されている、守られているという安心感を抱きます。そして、ますます夫を支えます。これが夫婦の好循環です。その逆もあります。妻が、夫のしていることを疑います。信頼していません。すると夫はますます、妻に心を明かさなくなります。そうすると愛を妻は感じられなくなるので、ますます夫に従えなくなります。この悪循環を断ち切らないといけません。それは、「相手がしてきたら、私はこうする」という五分五分の姿勢では断ち切ることはできません。主から命じられたことを、相手がどう反応してこようが行っていくことです。これには、聖霊の助けと祈りが必要だ、ということです。

3B 頭 1コリント 11 章 3 節

夫婦関係を、権威として、秩序として説明しているのが、コリント第一 11 章 3 節です。「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」キリストの頭が父なる神、そして男の頭がキリスト、そして女の頭が男です。この権威系統が理解できること、これが男の働きと、女の働きが分かり、神のデザインにしたがった生き方ができるので、とても楽になれます。言い換えると、真実な「男らしさ」とは何か？また真実な「女らしさ」とは何かを追及できます。ダビデは晩年に、その子ソロモンに対して「男らしくありなさい」と言いました。パウロはコリントの人たちにも、「堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。(1コリント 16:13)」と言いました。男らしさとは何なのか？であります。同じように聖書には、女らしさも書いてあります。女としてほめたたえられている箇所があります。

このコリント第一 11 章 3 節によりますと、男らしさというのは「徹底的にキリストに向かい、キリストに服従する」姿であります。主なるキリストに全てを明け渡し、果敢に主の前に出て行って、へりくだること。主イエス様に従っている男が、真の男です。そして女らしさというのは、イエス様に従っている男に、とことんまで付いていくことであります。従うことです。男が主から、「これがイエス様に従うことなのだ」と示されていることであれば、どんなことがあっても従い、支えていきます。男は、だからキリストを頭とします。その模範は、キリストご自身が父なる神にいかに服従し、従われたかを見ればよいでしょう。そして、女はそうした、キリストを頭としている男を頭とします。聖書の中では、神に従うアブラハムに付いていくリベカがいるでしょう。主を恐れるヨセフのいいなづけ、イエス様の母であるマリヤがいるでしょう。そして、これらの姿は、これから見ていくと分かりますが、私たちの考えている、この世の言っている男らしさと、女らしさとは大きく異なる姿であります。

2A 男らしさ「神の前に出られる男」詩篇 51 篇

男らしい男として、その手本をダビデに見たいと思います。神に選ばれ、愛されたダビデであります。彼と対照的なのは、人に選ばれたサウルでした。主に油注がれ、人々が彼を王とする時に隠れていたサウルがいました。御霊に満たされペリシテ人と戦ったものの、表向きは主の前に出る行動は起こしました。けれども、主の御声に聞き従わないで、ただ主の前でいけにえを捧げるそ

の表向きの行動だけには固執していました。しかし、主から聞き、この方に従うことについては、最後の最後まで拒み、ついに魔女のところについて伺いを立てるといふ惨めな結果に終わっていません。戦いに敗れて自害する時も、ペリシテ人に打たれたこと、その面子を気にして道具持ちに殺させました。表向きは主の前に出ているようで、実際には主の前に出ていないのです。

ダビデは対照的です。主との交わりは、あの詩篇を見ればお分かりのように、彼は幼い頃から行なっていたことでしょう。主に選ばれました。そして自分の名声ではなく、主の御名がそしられたことに対して非常に怒り、それがあのゴリヤテとの戦いにつながりました。彼は主にイスラエルの王として選ばれたことを知りましたが、それを大事にしましたが、それは自分が王になりたかったからではなく、主ご自身が選ばれたという、主を恐れ尊ぶその思いから、しっかりと王の務めを行ないました。そのダビデが、真実な男、主の前に出られていることを示している聖書の箇所の一つが、詩篇 51 篇であると思います。そうです、そこは彼がバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、夫ウリヤを殺したことについて、罪の告白をした箇所です。ここが男らしいと言ったら、びっくりするかもしれません。けれども、主の前に果敢に出ていくことにおいて、彼は勇気をもってその砕かれた魂を主に捧げたことにおいて、男らしいのです。

1B 自分の責任 1-4

51 指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき 51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

何がダビデを男らしくしているか？自分が罪を犯した、主に対して罪を犯したと告白しているところです。自分のしていることに対して、責任を負っているということです。「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。」と言っています。彼が実際に行った悪は、バテ・シェバに対するものでありました。またウリヤに対するものでした。しかし、これらのことを全て治め、主権を持っておられる主ご自身に対して、本質的には彼は罪を犯したことを知っていたのです。自分の愛する主に対して、このようなことを犯してしまったというとても後悔であります。

しかもダビデは、「あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」と言っています。主が裁かれれば自分に害が及びます。実に、彼の家から剣が離れることなく、アムノンがタマルを凌辱し、アブシャロムがアムノンを殺し、アブシャロムがクーデターを起こして、最後にアブシャロムが戦死するという事態に陥りました。しかし、このような裁きが下っ

でも、それでもダビデは、主は正しく、良い方だ、憐れみのある方だという信頼を捨てていなかったのです。このような主に対する圧倒的な信頼がダビデにはあります。彼は主の前に出て、自分自身の罪によってこれらのことが起こっていたことを認めました。このような個の確立、主の前に出ていく人格が彼の中にもありました。そこに、男らしさがあります。

2B 透明性 5-9

51:5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。51:7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。51:8 私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。51:9 御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。

ダビデは、自分の罪の性質について、母親の胎にいる時から罪ある者であることを認めました。つまり、彼はその存在が主に全て見られており、罪ある者として生きていることを知っていたのです。こうした透明性が、彼にはありました。サウルのように、私たちはどこかで隠そうとしてしまいます。取り繕ってしまいます。しかしダビデはそれをしませんでした。

日本の男、女性もそうですが、日本にある大きな問題は、物事に対する消極性です。それは言い方を変えると、自分を守ろうとする自己中心性です。人に対して自分の体裁を保つことは自然に行なっています。けれども自分自身がどう考えているのか、何を感じているのか、そうしたことが全て主に見られているのに、その核の部分は自分の内にとどめて置こうとします。それで何かを行なわなければいけない時に行わないという、自己保身に傾きます。それは、「プライド」であり自我があります。日本語で内弁慶という言葉がありますね、そのような態度です。主の前に自分が見られているというところに立つ時に、人の前でどう見られているのかという恐れは起こりません。自分の責任はもっぱら、主に見られているのだという意識から出ています。

この前の聖地旅行で、日系の人々も旅行に参加していました。カルバリーチャペルに長年通っている夫婦が、私にしばしば話してくれることがあります。アメリカのカルバリーチャペルの牧師は、例えば、グレッグ・ローリーは他の牧師やクリスチャンと談笑しているとき、子どもに帰ったかのように大笑いしてその会話を楽しんでいる、と言います。自分を飾っていない、自然体なんですね。その旦那さんは信仰を持つ前に、日系の教会の牧師さんの、あまりにも丁寧な言葉、ちょっと間違えると女っぽく聞こえる言葉遣いがどうも苦手だったのだそうです。そうです、主に見られている、裸になっているということを知っている人には、人々は近づきやすくなります。

3B 神の恵み 10-15

51:10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。51:11 私をあな

たの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。51:13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。51:15 主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。

ここにあるのは、神の恵みに浸かっているダビデの姿です。罪が赦され、救いの喜びを取り戻したら、神の義を高らかに歌わせてくださいと言っています。神の恵みによって生きているのだということ、はばかることなく生きられる人が本物の男です。自分の過去を忘れることはありません。しかし、自分の過去の罪が神の前にまだ覚えられていると思って、それに縛られることも神の御心ではありません。こんなとんでもない罪人を神はキリストによって救ってくださったのだという喜び、その救いの喜びをもっている姿です。そこには、いつも「私が罪人のかしらだ」という、ヘリくだりが必要です。

4B 砕かれた魂 16-19

51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

そうです、砕かれた魂を主の前に持って行っているかどうかです。サウルは、いけにえは持って行きましたが、いつまでも砕かれませんでした。彼は臆病な人です。恐れ退いて、滅んでしまった人です。ダビデは神を信じて、救われた人です。

3A 女らしさ「主を恐れる女」箴言 31 章 10 節以降

こうやって男らしさを見ましたが、今度は女らしさを見ましょう。女らしさにおいて、最も有名な箇所は箴言 31 章 10 節から始まる、「しっかりした妻」です。ここは、ユダヤ教徒の人たちが安息日を迎えるにあたって、ろうそくに火を灯しますが、それを行なうのは母です。箴言 31 章のこの箇所を思いながら、家において妻が尊ばれる中で安息日を迎えます。それほど大事にされている箇所であります。

ここに出てくる妻は、どのような印象だったでしょうか？ 私たちの思い描く女というのは、主に二つの部類に分かれます。何も言わずに、言われたことを行なっているおとなしい人、そして人々のお世話をするのは好きだけれども、内側に籠っている人という、弱々しさ、受動的な姿が「女」という言葉に付きまといます。もう一つは、その反発からキャリア・ウーマンのような女性が輝いているという見方です。全ての人には平等だ、だから権威や秩序というものに縛られてはいけぬ。そして、自分を中心にして物事をまとめようとする姿です。しかし聖書的な女性は、そのどちらにも当ては

まりません。

ここに出てくる妻は、強く、威厳があり、多才であり、積極的に、主体的に人々に心をかけている、個をもった女性です。貧しい人にも心をかけ、家の一人一人に気を使っています。そして、投資も行ない、自分の下に付けている女性たちもおろ、不動産経営までしている人です。そして夫の良き助け手であり、夫からも子どもからも全幅に信頼を置かれていて、家事やそれらの商いについてしっかりと責任を取っている、勤勉な女性の姿であります。そして何よりも、すべての力は主から来ることを知っている、「主を恐れる女」これが立派な女であると締めくくられています。

箴言というのは、面白い構成を持っています。主を恐れることが知識の初めという言葉から始め、それから父の訓戒、母の教育として、あなたは聞き従いなさいという命令から始まります。そして、それがなんと 9 章まで続きます。そこにはいろいろな話題がありますが、最も大きな話題は、「女から遠ざかりなさい」というものです。彼女の道に迷い込んではいけないという戒めを与えています。それに対抗して、知恵を姉妹のように恋い慕いなさいと強く勧めています。そして「知恵」が擬人化されています。女のように語られています。8 章には、日本語訳には出てきませんが、英訳ですと、例えば 1 節は、「知恵は呼ばわらないだろうか。英知は彼女の声をあげないだろうか。」と彼女として呼んでいます。そして、知恵についての箴言が 10 章から始まります。そこにも続けて、女について書いてあります。

そして 31 章において、レムエルという王がその母から受けた言葉として書き記しています。そこにおいても、王として女にその力を費やすなという戒めが書かれています。そして 10 節から、ではどんな女を尊べばよいのかということですが、「しっかりした妻」として具体的に、その理想の姿として出てくるのです。彼女の姿は、まさにこれまで知恵だと呼ばれていることを行なっている姿であり、締めくくりが 30 節、「麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」となっているのです。

1B 夫の強い助け手 10-12

31:10 しっかりした妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。
31:11 夫の心は彼女を信頼し、彼は「収益」に欠けることがない。31:12 彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。

彼女の第一の特徴は、「力ある夫の助け手」であるということです。家計をしっかりとやりくりしているだけでなく、彼女自身が働く収益もそれに加わっています。そして、夫に良いことをし、悪いことをしないというのは、自分にとって都合の良い時だけ動くのではなく、しっかりといる、安定していることを意味しています。だから信頼できます、頼れます。彼女の行動が、他の誰かにどう思われているのか、どのような取り扱いを受けているのかによって態度を変えることはありません。強い女であり、弱々しい消極的な意味合いを持つ「女っぽい」という言葉とは正反対であります。

2B 進んで行なう勤勉さ 13-18

31:13 彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、喜んで自分の手でそれを仕上げる。31:14 彼女は商人の舟のように、遠い所から食糧を運んで来る。31:15 彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、召使の女たちに用事を言いつける。31:16 彼女は畑をよく調べて、それを手に入れ、自分がかせいで、ぶどう畑を作り、31:17 腰に帯を強く引き締め、勇ましく腕をふるう。31:18 彼女は収入がよいのを味わい、そのともしびは夜になっても消えない。

しっかりとした女の第二の特徴は、「勤勉さ」であります。これも、誰かにどう思われているのかというような、消極的なものではなく、進んで、喜んで行なっている勤勉な姿であります。毎日の買い物のような、いつもの作業においても、勢いを持っている、つまり自ら進んで喜んで行なっている姿が見えます。それから自分には召使いの女がいるのですが、家の者たちのために食事を整えた後は、しっかりと用事を言いつけます。自分の下に働いている人たち、自分の権威の下にいる人たちをしっかりと見ている、時間を費やしています。決してないがしろにしません。彼女たちに時間を費やすことは、全体の益になることをしているからです。

それから、畑を購入して、稼ぎ、そして収入を数えている姿は、しっかりと頭を使って考えて、計画を立てて行動しているそれであります。当時は、電話やラインはありません。こうした重要な決断において、夫に頼るのではなく自分自身で判断し、決断していきます。近視眼ではありません、遠くを見つめて、長期的に益になることを見据えて今の行動を取っています。それから、腕をふりあげている勇ましい姿も出ていますね。思い出ずに、リベカはアブラハムの僕のらくだ十頭のために、勇ましく水を飲ませていました。自分の健康も管理しつつ、家計を賄っています。

3B 先を見越した心遣い 19-25

31:19 彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、手に糸巻きをつかむ。31:20 彼女は悩んでいる人に手を差し出し、貧しい者に手を差し伸べる。31:21 彼女は家の者のために雪を恐れない。家の者はみな、あわせの着物を着ているからだ。31:22 彼女は自分のための敷き物を作り、彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。31:23 夫は町囲みのうちで人々によく知られ、土地の長老たちとともに座に着く。31:24 彼女は亜麻布の着物を作って、売り、帯を作って、商人に渡す。31:25 彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。

彼女の第三の特徴は、「心遣い」です。悩んでいる人、貧しい人に手を差し伸べています。単に、お金をあげるだけではなく、気を留めています。心を持っています。さらに自分の家族のために服を、冬になる前にきちんと用意しています。箴言には、蟻に知恵があると書かれているように、実際に事が起こる前に前もって準備する、そして実際に事が起こった時には行動できるようにしておく。これが知恵であることが書かれています。さらに、夫は役人であったようです。彼が仕事をすることができるように支え、また自分自身のこともきちんと管理しています。敷物を作り、着物のも夫

の妻にふさわしいものを来ています。自分のことも、家族のことも、夫のことも、そして貧しい人たちのことにも気を留めていられる人です。

4B 勝ち取られた栄誉 26-31

31:26 彼女は口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みのおしえがある。31:27 彼女は家族の様子をよく見張り、怠惰のパンを食べない。31:28 その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言い、夫も彼女をほめたたえて言う。31:29 「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまさっている。」と。31:30 麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。31:31 彼女の手でかせいだ実を彼女に与え、彼女のしたことを町囲みのうちでほめたたえよ。

彼女の第四の特徴は、「他人からの栄誉」です。彼女は、誰にも知られないような奴隷のような存在ではありませんでした。言われていることをただ行ない、人々の要求に答えようとしても答えられず、不満を言われているような人ではありません。しっかりと計画し、前もって用意し、それゆえに威厳があり、気品があり、力だけでなく恵みがあります。言葉において、知恵を持っていました。恵みがありました。教えることができました。こうやって、その良い行いは知られていたのです。まずは夫に、それから子供、そして町囲みの人たちにほめたたえられていました。

いかがでしょうか、これをぜひ女らしさであると定義してください。この基準で、他の聖書の人物を眺めてみると確かにその通りだと思うでしょう。アブラハムの妻サラ、リベカ、モーセの母、士師デボラ、サムエルの母ハンナ、ペルシヤの王妃エステル、イエス様の母マリヤなどなど、数々の女がその勇ましさ、主体性、勤勉さ、そして健全な自負心と安定感、他者への顧みがあります。これらが全て、主を恐れる中で出てくるものです。箴言の中で知恵と呼ばれるものを行なっている結果です。

女性と言えば、「麗しさ」「美しさ」を基準とします。麗しさというのは、チャーミングと言ったらいいでしょう、「可愛い」と言ったらよいでしょうか。その柔らかさ、やさしさ、そのようなものを基準とします。しかし聖書の女性は違います。勇ましさ、行動、計画、能力があり、これらを、すべて夫を支えるために使っていく、その従う心を持っています。これこそが、女性の尊厳、神の御心にそって造られた女の姿です。そして男は、砕かれた魂で主の前に立つことのできる勇気のある男が、男らしいのです。自分を隠してよく見せることを考えているプライド、それが無い姿です。これこそがキリストに徹底的に従う姿であり、女はそんな男に従う時に美しく輝きます。